Osaka Shoin Women's University Repository

『袖貝の記』校異

—『太平記』のための基礎的覚書—

谷垣伊太雄

(一)

尊良親王の土佐配流については、『太平記』巻十八「一宮御息所事」に詳しい記述がある。

この「尊良親王配流譚」[注1]に関しては、『太平記』以外に、『中書王物語』、幸若舞曲の『新曲』、謡曲の『武文』・『松浦五郎』、浄瑠璃の『松浦五郎景近』等のほか、『淡国通記』・『淡路常磐草』・『淡路草』・『淡路堅磐草』・『淡路国名所図絵』・『味地草』等の淡路島を中心とした諸文献、『土陽淵岳誌』・『袖貝の記』・『南路志』・『小袖貝のゆかり』等の高知県を中心とした諸文献がある。[注2]

さらに、後藤丹治氏は『戦記物語の研究』および『太平記の研究』において、「一宮御息所事」の影響をうけたものとして、『李娃物語』・『鶴の草子』・『鳥部山物語』・『小倉物語（四人比丘尼）』・『花子こひ物ぐるひ（花子物ぐるひ）』・『花の名残』・『四天王剿盗異録』・『標注園の雪』・『俊寛僧都嶋物語』・『絲桜春蝶奇縁』・『南総里見八犬伝』・『再栄花川譚』等の諸作品をとりあげておられる。[注3]

ところで、筆者としては、『太平記』を原点とした様々なる「尊良親王配流譚」を詳細に点検する事によって、諸作品に関する各論を進めるとともに、『太平記』の伝播・享受の問題をも考え、さらに遡って、その形成・成立というような所まで、考察を深める事ができないであろうか、と考えている次第である。もちろんその場合『太平記』に比して時代が相当下るものも多く、幸若舞曲・謡曲・地誌などと内容も多岐にわたるため、単純な並列的比較は許されないであろう。したがって、諸作品の個別研究と比較研究との緊密な連関を通じて、『太平記』研究を進めるための一助としたいというのが、筆者のささやかなる願いである。

(二)

さて、本稿では、前記諸作のうち『袖貝の記』をとりあげること

Osaka Shoin Women's University Repository

『花子こひ物ぐるひ（花子物ぐるひ）』・『花の名残』・『四天王剿盗異録』・『標注園の雪』・『俊寛僧都嶋物語』・『絲桜春蝶奇縁』・『南総里

さて、本稿では、前記諸作のうち『袖貝の記』をとりあげることとする。『袖貝の記』は、土佐の国学者今村楽[注3]（明和二年―文化七年）の作とされているものである。今村楽の著作については、『今村楽家集[注4]』が、まとまった形で活字化された唯一のものである。ただし、この書も、細部にわたっては誤脱等も見られるため、今回は『今村楽家集』所収の『袖貝の記』を、他の写本と比較点検する事によって、『袖貝の記』の基礎的確認をしておきたい。

写本として管見に入ったものは三種である。高知県立図書館（山内文庫）所蔵の一本は、本文の前（別紙）に「かたみなる入野の濱の小袖貝むかししのひてとわにぬれつつ」・「そのかみのそのふることを今も猶思ひいてつゝぬるゝそてかひ」という和歌二首と袖貝の墨絵とがあり、本文の終わりに次のような奥書がある。

「弘化三つのとしやよひはかり今村斉成大人かける處かりもとめて
うつしぬ
今村稲守
眞鍋忠孝の
みもとに　」

高知県立図書館（山内文庫）所蔵のもう一本は、右の写本とは別筆で、和歌・墨絵・奥書がない。

もう一本は徳島県立図書館所蔵本である。この写本は、本文の行数が異なる事を除けば、和歌二首・墨絵および奥書がある点で、高知県立図書館所蔵の一本とほとんど一致するものである。

ここでは、高知県立図書館所蔵の二本と『今村楽家集』所収の『袖貝の記』とを表として比較したい。[注5]

『袖貝の記』比較表

『今村楽家集』	高知県立図書館所蔵本
1 土佐の國幡多の郡入野の濱に、袖貝といふ貝あり、	1 幡多郡大方の江入野（別）
2 形は蛤の如くにして、その殼のうらうへのあ	2 なり（高）そのなりは蛤にゝて（別）から（高・別）
3 ひたるが、かたへの少しく打ち違ひあきて、袖口に	3 よきひとの袖口に（別）
4 似たるもをかし、さてそのあやなん種々ありて、うる	4 くさ〳〵（高・別）
5 はしき事比類なく、先づ濱邊に落ち松葉、霞	5 たぐひ（高・別）先その品々をいはんに（別）つまへに（高・別）
6 にほしあみ、などは世の常にして、あるは赤石の	6 明石（高）あかしの浦（別）
7 曙、あるは淀の渡り、あるは矢走の舟、あ	
8 るは三保の富士、あるは鹽釜の煙さへ、寫	8 けむりをさへ（高）煙なと（別）

Osaka Shoin Women's University Repository

9 せるがまれ〳〵にあなるは、げになんいみしき見物
10 にはありける、そはこの貝をしも、さはに集むる人
11 ぞ知るべきかし、この貝如何なる故由をもて、この
12 濱には出で來にけんと問ふに、里人語り傳へて
13 いへらく、古元弘の昔、北條の高時、おのが
14 まに〳〵世を振まひたりし時、掛け巻くもかし
15 こき天皇を、隱岐の國に流し奉ママ、
16 その一の宮をなん、土佐ママ幡多に流しまゐら
17 せける、この入野の濱の近き山陰に、かりそめの宮を
18 造りて、いませ置き奉りぬ、いとゞ田舍のはて
19 なりければ、御心をなぐさめ奉つる者もな
20 く、猿のさけび、海士のさへづりのみにして、松の露に
21 御袖の涙を增し、浪の音に曉の御
22 夢を破ふりにければ、只都をこひしのばせ
23 給ふばかりにて、其の御樣いと哀に見えさせ給ひつ
24 るを、さもらひ仕へまつる人の中にも、有井の庄
25 司なん心ある人にて、なにか苦しくはべるべき、御息
26 所をむかへまゐらせて、御心をも慰さめさ
27 せ給へとて、御むかへの料にみけし一重
28 したてゝ、道の程の事迄こまかに沙汰し參ゐ
29 らせて、御使には泰ママの武文とて、只一人めし
30 つかはれつる御隨身なん御文給はりて、都

9 いみしき品（別）
10 この袖かひといふものさはに集めもたらん人（別）
11 はしるべき（高）そしりぬへき（別）
12 といふに所の人（別）
13 いにしへ（高）いにし（別）
14 世に（別）
15 すめらみこと（高・別）隱岐國（高）たてまつり（高・別）
16 一の宮尊良親王を土左の幡多に（高）一の宮尊良親王をなん土佐のはたには（別）
17 せ奉り（別）さてなんこの入野の（別）
20 海士のさひつり（別）
22 いめをやぶり（高）都の御事のみ（別）
23 いともあはれになんみえさせつ（別）見えさせつ（高）
24 さもらへつかへまつる（高）
26 つれ〳〵の御心をも（別）
27 給へかしと申なため奉りて（別）
28 又道のほとの御ことまて（別）
29 秦の武文（高・別）
30 つかはせ給ひつる（別）

31 には上りにける、もとより亂れたる世の中なり

31 登りにけりみたれよの中（別）

Osaka Shoin Women's University Repository

31 には上りにける、もとより亂れたる世の中なり
32 ければ、元の御住所に居給ふべくもなく、辛く
33 して嵯峨の奥に尋ね入りて見え奉り、遂
34 に御供仕へまつりて、津の國大物の浦迄下
35 りけるに、筑紫人に松浦五郎と云ふ荒
36 男なん、御息所のあてやかなる御樣をかいま
37 みて、奪ひ取らんの心つきたりける、夜に入り
38 人定まる頃ほひ、我が手のものあまたつかはし
39 て、武文が宿りを圍ませけるに、武文は盗
40 人おそへりと思ひ取りて、かひがひしき男
41 なりければ、只一人してあまたの者共を、
42 あるは切り伏せ、あるはおひちらして、ふせぎける
43 に、彼等火を放ちて攻めたりければ、其の煙
44 りにたへ兼ねて、先づ御息所を背負ひ奉
45 り、濱邊に出でゝ、いづれの船にまれ乘せまゐらせ
46 よとよばはりければ、松浦が船きゝつけて、幸
47 ひの事哉とよせつるに、武文其の由はつゆ
48 ほども知らずして、其舟館に御息所を乘せ
49 まゐらせしは、哀はれ神も見放ち給ひけんかし、
50 元の所に歸りてみれば、早や彼の宿りは
51 燒けうせて、御供の女共もなくなりにけり、武文は
52 渚に出でゝ、彼の船よせよとよばはれども、聞き

29 らせて、御使には秦の武文とて、只一人めし
30 つかはれつる御隨身なん御文給はりて、都

31 登りにけりみたれよの中（別）
32 すみかにゐ給ふ（高）宮にはゐ給ふ（別）からうして（別）
33 をくにいりてまみへたてまつり（高）おくまで尋いりてまみ
え奉り（別）
34 御佐つかへ（別）
36 御さまをかひま（高）
37 つきたりけり（別）
38 人さとまりて（別）
39 たひのやとりをかこませけり（別）かこわせける（高）
40 おそへりとのみおもひ（別）
42 あるは切ふせ又は（別）
44 御息所をそひらにおひ奉（別）
45 出てやよやいつれの舟にまれ（別）
47 よせ來れり武文はかれらかなめしきはかり事をは（別）
48 つゆしらすして（別）そのやかたに（高）
49 參らすあはれ〳〵天地の神祇も（別）
50 武文もとの所（別）彼旅のやとり（別）
51 はやく燒うせて（別）武文（高、「武文は」別本ナシ）
52 船よせをと（別）

29 秦の武文（高・別）
30 つかはせ給ひつる（別）

Osaka Shoin Women's University Repository

53 入る可くもあらず、眞帆風にまかせつゝ、沖の方
54 に出で行くめるを、海士の小船に打ち乘りて、追ひ
55 つかんとはしたれども、かなふべくもあらずして、扇をあ
56 げてまねきけるに、そを笑ふ聲して益々船は
57 遠ざかりけり、武文いかりのゝしりて、いまの程
58 こそあれ、龍神となりて目にものみせんと云ひつゝ、
59 腹かき切りて海の底に入りにける、御息所は
60 夜打ちの入りし程より、只夢の心地して
61 きえ入るばかりにありければ、船館の中にても、
62 御顔だにもたげ給はぬを、彼の荒男
63 近くより來て言葉だみつゝ、様々にな
64 ぐさめこひくどきまゐらせぬるは、いかばかり
65 かなしと思したりけん、かくてその船阿波
66 の鳴戸を過ぐる時、風俄かに變はり、うつ汐
67 さかまき立ちて、ほと〳〵にはめつべく見えけ
68 れば、例の神のものほりせるなるべしと、弓矢
69 太刀かたなをはじめ、種々なげ入れたれど、
70 尚やむべくもなく、やんごとなき御方の、よき
71 きぬにやめでぬらんと、心なくもぬき取りて、海
72 に入れたりければ、紅に匂ひて

54 をふねにとりのりて（別）
55 おひしかん（別）あらずて（高）あらす（別）
56 まねけるに（高）まねきけるにそをあさけり笑ふこゑのとほとに聞えて船は（別）
57 沖にそ遠さかりける（別）
58 目にものみせてんものをと（別）
60 夢の御心地して（別）
61 きえいるはかりありければ（高）きえいるはかりにおもほしけれは（別）
62 かのあらをのこ（高）
63 さま〳〵にいひ（別）
65 口をしくかなしくおもほしめしたりけん（別）かくてその舟（高）かくてかの船（別）
66 なるとをわたる時（別）俄にかわり（高）
69 くさ〳〵のものを投入たれと（別）
70 やむべくもなし（高・別）
71 心もなく脱とりて（別）
72 波はくれなゐに（高・別）

Osaka Shoin Women's University Repository

71 きぬにやめでぬらんと、心なくもぬき取りて、海
72 に入れたりければ、紅に匂ひて

73 しばらくは沈まれと、船はなほ元の所
74 にすわりたり、この鳴戸に漂ふこと、三日三夜
75 の程なりければ、皆醉ひ伏して、苦しむこと
76 限りなく、彼の荒男もよしなき人を
77 奪ひ取りつるむくいにやと悔ひ思ふ間に、梶
78 とり舟底よりはひ出でゝいへらく、これたゞ
79 事にあらじ、やんごとなき御方に、海龍王の
80 心をやかけぬらん、この御方一人によりて、
81 あまたの人の命を失ひはべらんも
82 くちをし、いともかなしき御事にしはべれど、海
83 に沈づめ奉らば、この禍はのがれはべ
84 るべしと云ふに、荒男うべなりと聞きとり
85 て、かつは變の叶はぬきたなき心も打ち
86 交りけん、あらゝかに引き起して、海に沈めん
87 とするなるを、法師の乘り合ひたるが見付け
88 て、様々にいさめければ、其の業は止まりき、
89 法師の勸めに依りて船の人々佛の
90 御名を唱ふる程に、怪しきものゝ限り
91 なく見ゆるが中に、彼の太物の浦にて腹
92 切りたりて武文が、いかれるすがたのあらはれけ
93 るは、さてなん彼の男の怨靈なるべき、試
94 にやんごとなき御方を小船におろしま
95 ゐらせよとて、かこ一人を附けて乘せ

71 心もなく脱とりて（別）
72 波はくれなゐに（高・別）

73 しづまれど（高）静りたれと舩は猶もとの鳴門（別）
74 にそすわれけりけるこゝにたたよふ（別）
76 かきりなし（別）
77 むくひにや（高・別）くいおもふ（高）
82 いともかなし御事（高）
83 此わさはひをは（別）
85 かつはかなはぬこひのいきとほろしさにあらゝかに（別）
87 とするさまなるを（高）とするを（別）
88 ていさめければとゝまりにき（別）
89 さて法師のすゝめによりて舟の内こそりて佛の（別）
90 みなをとなふほどに（高）あやしきものゝみゆる（別）
91 みゆる中に大物のうらにて（別）かの大物のうらにて（高）
92 きりたりし武文（高・別）
93 ければ（高・別）なるべし（別）
94 はし舩（別）

Osaka Shoin Women's University Repository

96 奉りけるに、
97 御息所の御船は淡路の武島に着
98 きぬるに、彼の船は沖の方に吹き流されて、
99 行く方知らすなりにけり、彼の海に入れたり
100 し色濃ききぬの、浪に漂ひ流れ來て、
101 遂にこの入野の濱の岩に掛れりけるを、浦
102 人の取り上げて宮に見せ奉りたるに、
103 宮は武文をつかはされしより、月日をふ
104 れども歸へらざりければ、いかにかなりぬらんと、兎
105 や角と思し煩らふ頃ほひなれば、怪
106 やしのものやと見そなはすに、色こそそこ
107 ねつれ、彼の有井の庄司が仕立てゝ、武文に渡
108 しつるきぬなりけり、其の印をと裁
109 ち餘したる切れのありけるを、取り出でゝ
110 比らべ見給へば、綾の紋のつゞき、少
111 しもたがはざりければ、やがて伏し沈
112 み給ひけり、御息所の此の世にましますと
113 は知り給はず、千尋の底の水草となり
114 けんと、かなしみ給ふもことわりなりけり、
115 さて御息所を始めて武文をさへに、
116 御經書き給ひて後のわざいとなみ給ふを、見聞き奉つる人

96 たてまつりけるにあやしやかぜのふきわけて（高・別）
97 みふね（高・別）淡路のぬしま（別）
98 松浦かふねは（別）
102 宮にそ見せ奉りける（別）
104 ふれともかへりこと申奉らねは（別）いかになりぬらんとや
かくや（高）
105 かにかくにおもひわつらひ給へる御ころほひなりけれは（別）
ころぼひ（高）
106 色こそうつろひにけれ（別）
107 まさしくかの有井の庄司か（別）
108 猶も其しるしをと（別）そのしるしをたち（高）
109 たちあましたるきぬ（別）
110 あやのもんのつゝきの（別）
112 たまひにけり（別）御息所この世に（高）
113 そこのみくづ（高）
114 けむとかなしみ給ふも実御ことはりにそまし〳〵ける（別）
116 御經を（別）御經かきたまふを見きゝたてまつるひと（高）

Osaka Shoin Women's University Repository

117 々も皆なみだに沈みにけり、そのきぬ
118 の掛りし岩を、今尚ほきぬかけ岩といふ、
119 かかる由縁(イ)よりして、この貝こゝに出で
120 しとなん、附て云ふ此の入野の濱に御舟
121 の着し頃にやありけん　宮
122 土佐の海に身は浮草の流れ來て
123 よるべなき身を哀れとも見よ
124 と御歌のありけるに、大平何某とかや
125 かしこくも御返し奉りける、
126 哀れともいかであふがん及びなき
127 土佐の入江の藻がくれにいて
128 又彼の山陰の行宮に、住みわびさせ給
129 ふほどにやありけん、
130 我が庵は土佐の山風さゆる夜に
131 軒洩る月の影氷るなり
132 又或る時時鳥を聞き給ひて
133 鳴けば聞く聞けば都の戀しきに
134 この里過ぎよ山時鳥
135 この御歌より、今尚ほ彼の行宮のありし里
136 のわたりに、時鳥の鳴ぬも怪しか
137 りけり、此の外に御歌も猶ありけめと、
138 語り傳へざればいかにかしてまし、

118 きぬかけばへ（高）きぬかけはえ（別）
119 ゆかり(イ)(高・別)このかひのなりいで(高)此貝の爰にはいて(別)
120 来にけりとなん（別）宮のみふね（別）
121 ころの御事にや有けん（別）宮（高も別もナシ）
123 あはれとはみよ（別）
125 かしこくも返し奉りける（別）たてまつる（高）
127 もかくれにゐて（高・別）
128 やまかけのかり宮（高・別）
130 さゆる夜の（高・別）
135 かのかり宮（高）かのかり宮有し（別）
138 かしこにかたりつたへされはいまはいかにかしてまし（別）
いかてかしてまし（高）

Osaka Shoin Women's University Repository

注

1 土佐配流のことだけでなく、御息所との出会いから死に至る、尊良親王に関する全てのことを、この名称で総括する。

2 これら諸文献については、『解釈』昭和五十年六月号に「尊良親王配流譚の資料的研究」として述べたほか、昭和五十年度全国大学国語国文学会春季大会（六月八日・専修大学）において口頭発表し、『王朝』第九冊にも「尊良親王配流譚をめぐって―『太平記』の一研究―」（昭和五十一年六月十日発行）と題してとりあげた。ただし、謡曲『松浦五郎』については未見であり、信多純一氏の『松浦五郎景近』解題（国書刊行会・昭和四十九年十一月十日発行）を参照させていただいた。

3 字は子成。通称は丹次のちに虎成。狂号は渋柿蒋成。

4 今村楽の曽孫今村雄久馬氏を著作兼発行者として、大正十一年八月十五日に発行されたもの。短歌・雑体・長歌・文章・考証・紀行・附録という項目から成っており、『袖貝の記』は「文章」の項に収められている。

5 上段に『今村楽家集』を掲げるが、行数は、奥書をもつ高知県立図書館所蔵本の本文に従い、数字を付した。下段には、写本二種の異同を記す。その場合、和歌・奥書を有する写本を「高（高知県立図書館所蔵本）」、もう一本を「別（高知県立図書館所蔵別本）」と、それぞれ略記する。イ・ロは漢字のよみである。なお、右の「高」本と徳島県立図書館所蔵本との異同は次の通りである。数字は表のものと一致する。

行など	名称	高知本	徳島本
巻頭和歌一首目		むかしししのひてと	むかしししのひてと
		わにぬれつつ	はにぬれつつ
16		ながしまいらせける	ながしまゐらせける
26・27		なぐさめさせ給へ	なぐさめさめさせ給へ
39		かこはせけるに	かこませけるに
66		俄にかわり	俄にかはり
77		むくひにや	むくいにや
82		かなし御事	かなし（一字不明）事
114		ことわりなりけり	ことはりなりけり
123		あわれともみよ	あはれともみよ

（追記）他の文献をも含めて調査の際、高知県立図書館および大阪市立大学国文学研究室に大変お世話になった。ここに記して謝意を表する次第である。